

## 「王育徳記念館」が台南市に開館

戦後、日本へ亡命し、36年にわたって日本における台湾独立運動に奔走した人物がいた。台湾語研究の大家でもある王育徳博士だ。王の命日にあたる9月9日、生まれ故郷である台南市では「王育徳記念館」が開館し、死後33年を経てようやく祖国への里帰りが実現した。

王育徳は1924（大正13）年に台南で生まれた。末広公学校、台南州立台南第一中学校、台北高等学校文科甲類を経て、東京帝国大学文学部支那哲学科に進学。幼少期には親の教育方針で四書五経を学び、台北高等学校時代には文芸部に所属して、漢詩や短歌、小説などの作品を発表する文学青年だった。

東京帝大に進学した頃、大東亜戦争の戦況悪化により、台湾に帰国した王だが、中華民国政府が台湾を接收して二二八事件が勃発すると、実兄の王育霖（日本で初めての台湾人検察官）が殺害され、自らも身の危険を感じて国外逃亡を決意した。1949年に香港へ脱出し、その後、日本に密入国した王は、当初「蔡仁徳」の偽名を名乗ったが、1954年に政治亡命であることが正式に認められると、特別在留許可を得て合法的な日本での滞在が可能になった。この間、東京大学文学部中国文学科に

再入学し、同大大学院修士課程と博士課程に進学している。

そして1960年2月28日、王は日本で台湾独立運動を推進するため「台湾青年社」を設立した。主な活動として、日本語で台湾独立を主張する機関紙『臺灣青年』を発行した。当時、他にも台湾独立運動の動きがあったが、王は在日台湾人や若い留学生から理論的共感が得られなければ運動は成功しないと考え、留学生らと台湾独立について議論を重ね、在日台湾人と日本人の理解と支援を得るため啓蒙活動に注力した。当時、参加した留学生の中には元駐日代表の許世楷氏や元総統府国策顧問の金美齡氏などがいる。

その後、1964年に『台湾一苦悶するその歴史』（弘文堂）を出版すると、2ヵ月で1万5,000部が売れる話題作となった。同書は客観的な史実を示すことで、台湾が中国の一部ではなく、台湾人の台湾であることを明らかにすることを目的とし、王が「やむにやまれぬ気持ちから書いた」一冊であった。

いくつかの大学で講師として勤務していた王は、1974年に明治大学商学部教授として奉職した。学者として研究を続け、台湾語の講義で教壇に立ち、台湾独立運動にも注力していた王

だったが、それらに加えて台湾人元日本兵の補償請求運動にも取り組んだ。1975年2月28日には発起人として「台湾人元日本兵士の補償問題を考える会」（会長：宮崎繁樹、事務局長：王育徳）を設立している。

上述のように日本における台湾独立運動の中心人物として、そして台湾語の研究者として、さらには未解決の戦後補償問題に取り組む日台の橋梁役として全力で走り続け、祖国台湾と台湾人を愛し抜いた王育徳は、1985年9月9日、心筋梗塞のため日本でその生涯に幕を閉じた。享年61歳だった。

今回の記念館開館にあたり、記念館前の広場では開館式典が行われた。日本から妻の王雪梅氏、次女で台湾独立建国聯盟日本本部委員長の王明理氏、孫の近藤綾氏ら親族も参加した。式典でマイクを握った雪梅氏は、「がむしゃあ（感謝）」、「どおしゃあ（多謝）」と台湾語で関係者や市民に対して感謝の言葉を繰り返した。また明理氏は、「父は日本に行って充実した人生を送れた」と話し、王が生前に親交のあったすべての関係者への感謝の気持ちを述べた。

そして王がとても可愛がっていたという近藤綾氏は、自身も台湾語研究の道に進み、台湾語の著作も執筆しており、今回もすべて台湾語でのスピーチだった。式典終了後、私は近藤氏にスピーチの意味を解説していただいた。「言語は民族の魂である」という王の言葉を大切にしているという近藤氏は、今後も台湾人の言語である台湾語を守ってほしいという。そのためにも子供達には台湾語で話しかけてあげて

ほしいと訴えた。

残念ながら王の遺志に反し、現在、台湾語は若者を中心に使用頻度が減少している。使用頻度が比較的高い南部であっても、20代の若者の中には、聞いて理解できても話すことは難しいという人が多い。近藤氏は発音が難しい台湾語の教育にはローマ字の使用が有効だと説く。台湾語教育のあり方の見直しも必要かもしれない

王育徳記念館の誕生は、台湾人が「民族の魂」について再考する一つの拠点になるだろうか。外国人にとっても「台湾とは」を考える上で興味深い観光スポットである。



王育徳記念館の開館を祝福する人々



記念式典で挨拶する王育徳の親族（左から次女・王明理氏、妻・王雪梅氏、孫・近藤綾氏）